縣門餘稿

五

へ 2
4379
3

〇の道記序

こゝのまれはやどりするちかつのみちまくに
ありしむかしてそのむかしにみえきこゆるさうら
しれいさよけのまほしなむあめつちのから
のやうにいちまてるるこれよるしそつきくに
さとはいにしていてるのあれどこれはいはかにか
れけにこころあかいうてこしのあそ

門 へ 2
號 4379
巻 3
昭和九年九月二十六日
購求

いなはつまみてさるたのしま江のさとかくらし
ちころにみゆかせるなむ多くのかくしされハ
山さとゆる駒ハちれはなしゆる梢をまた
峯によりゆる舟ハかいのしつみかすく日を数くさ
めはなるこハ多くみそむてなく待のうたもあり
やさしくそはいとおもしろき志のあるふ此二まきき
あつめおけるもあつめははあらハひとまそとりけにし

あはれなる山のしつくにもぬれしおもしろき
歌のあそびにかよてみしたかへのうつたはし能
さなゆくの郭公かきつめ給いよあつさの他あまた
書籍の多紀なそかれなきそのしきハあつねと見せさ
しそのせんにハまくハちらにしるあつて八方
のちくよまれる歌はいとおもそる此の葉の神はつる
きこえのみなるそのよつのひとつも杉かたしらん

人のまねぶ庵なもあらぬをうちつけにいふなそか
きはらかれいてやいふ我海のそらひなとの九あ
や椿のあやよ白きしき筆にまかせの外しとま
すいかまこころにえらぬ仲人々をつてかれまう
うしにあをせ下なにもまけにも仮たらひ
そこゆるさしかし

文化七年正月　藤原元雄

椿まうでの記

平春海

去年の秋こやとよ海うのばかきるふにとしむ月のほどより
の日、都のうちなべてのこころことなくやきてかたそめのよろびゐも
やすからねば、伊勢の国白子の里子村田の橘彦とて、あのがちかた
ゆかりなるかもとさこひ来て、よ日数をへおくりきたれ、
橘彦がそなりきる並樹といへるはこそやび人まで、かまくれと
まるき跡など問もとむるこそ、されしもにのとなりひと日、おのれ
かからくこの白子れ里より西なるすかはるすかいとある
うちゆる山あなすかかしき椿の明神とやらあいじなぞ

いふ神なんおそれなるそのあとゝてまうしも古き跡ぞの
これもおそれこそすれぼしうつろ、あはれさいつとしわれの
ぼりぬとそかゝる事も及ばぬことなれどもおほかた例の野山を
みとくる徒さこゝのとゞめがたくていざ立ちいるべし紅へなど
いひそめのしてきけばよそほの九日の日かどでぞすゞば
なかばいおくて再び二人ともれひいば櫻花はそでにのぼりめ
別きゝしこ来るや庭の櫻乃枝をとりて
山路ゆく君をとゞめよ我やどの花こそ植ゑし咲き初めし花
為し
契りはおもそむけれみもやさん櫻ぎれかへりて果ん君いかならじも

わかれんといひそてゝゆく、里ざはそれぞれかれ、雲の海
立つゞきそれて、松の嵐もうちかすめるに、去る山すみのかつこえ
かはうてまとうる海おさしよ、絵なれ人いはり取でゆく
烟うちあがきていうしへそのあともわひかられつゝ、來し
方のいまそれの匂もえおぼえず、神戸の驛を過てかひ
川をわたる、此川よりひて山の色村あり、めしきさ岡の
もとより山の邊乃浅井の跡なりとてあるを彩りよりて
みまかりてちりこある田よぼくりなしてまづ小井とおぼ
しくてあり、今まるもあせて再び老木の松の枝すこつ
小さまれたるが一本あんまでまゝある万葉集にこの山の

邑の浅井のうちえへる地は、賀茂の東にあたる山のへ村なる
すはあらで、いすゞの神宮の邑にをつしたてまつれるか、
そ道楷がことをしるに本居の翁の考ある此山邑村
なるが古の跡なるべしといへるとぞ、きゆゑよしもゆかな
いとこにわすれるやうにおぼゆれど、なにがしかくされにてすけ
ゆきしつ、石薬師の驛のかたはらより道を西北のすみにとりて
廣ぐ野といふ、この野を鴨の長明が歌にはいつゝ野とい
ひ、鳥丸光廣卿の歌にはつまが野ともよみ給へり、いまはをも
廣瀬てふ村のあるより廣瀬野ともいへり、又のぼ野とも
いへるぞいとあるき名のほとされるぞ、古事記にも日本紀

にも日本武の尊の能褒野までかへりおはしつと見えたるは
この野をいへるなるべし、ゆきゆきてうちのぞむに、あまた目路の
かぎり小松どものうちむらがりて、いはこをかざりともえわかず、
ゆくての左のかたへいもて桜などかすかにほころびて、すゞしく
いとおほうされたるも見えずしてすずしきをもしろみやすら
はずやなどいひて、並樹
見るまゝびにゆりしさそはる菫草ほまでいひそめ野べとる
べく、牛引つれたる翁人のおもてかをみなるが、桃さくらなど
よごとかざりてぞゆく、
さく花をまごとにさして傍の人もおもしろくみゆる野べ

こずゑは、冬の時すぐることなりけびてふぶきにいづれのむしろを
しるなりに、白鳥の陵なりとてさばかりなる塚とたがはしきが、
ちかごろなどうちあつらへるあまたあすけ多く居をしめ
こしはなし、一の跡ともえおぼえぬよるどいへど、並樹がもとに
さる事なりとおそれあるにも五天といへる法師のことを
白鳥の陵なりといさぎよく伝へられしも此しい島居もなくに
たきび塚といへるとなん、此野すけ塚ころおほきれ、車
づか、まご子塚ひよするばかりなどいふがこのちかきにはかり
すまあれど、陵なりんとたがはしきはあらず、いづれ此大野の
中にかの陵はおはすべきを、年へてそれさへしられず

まねよろ、ほさかの西の方にみゆる大山を、のぼりとなん
いふなる、山のかたつらに大なる石のひつきのあらわれ
あるなりとはいへど、のぼりのぼりのほとりにあすれるを、
これなん陵なるべきやなどいふ人もあれど、かくうち
かへりたるほどにはたちはかりね、さてやくおいしよ詣てたく樹の
社にまうでゆめるとてよいそぐ、山ちかくなるところに、石
やくさあしうれたがひ、あるせのはりわたしたくぶれて熱川
をわたる、さらにそれのかたに並ぶる陰をすぐれば、山ちかく
広くまさなきもさらにしらぬみられてまおゆくさかし
なきいひて、さらにしこて体かひぬ、さてそのかげをゆくに

ちりはなはいとせばし。岩ぎしにはかゝりみなぎりせば。ながれゆく川のいはほのあたりの布ひきてんやうなる流れの波石にあたりて白うれ雪ぶり。さゞなみくとなりとよめるあり。いそみねの松にひゞきあひぬ。はるかむかひなる山には兎むらごとに翠のきし影のこゆるいはほしじみこゝろわしめはる参りれずそさとすはわかさず。岩すこしめぐれば。こなたの山にそひて。かの志やくだいじなん。おそろしかなるかたを拔ぎすてとうりふなるげるかあをみえるか。いともくだきなる石まそれた候なるがかくかひ候ご一ま立待ひかるさ海、かくさらなる音のねどもとだえあらそひてたえてかるきこと

いくそばくともしれずひそみかゝし。その志よりはまさる根ざしのさふらいめきたるかすむ汁ひそし。此あたりの田もどものひでからちはやく時いきてかむかしかまくりて。歌うたひ笛ふきあそびて。この遊ことはとなすさめけれバ雨のなごりすまくやなんぞもくしやしぬい。いにしへはなするのをそれぞとふみ。むかしより文字には石大神と書まきかへさるはあるしいにしへのおほぼえとも此方へ来てよはりつらんの。延喜式に鈴鹿郡石神社とみえたれどこれをいふにや。並樹いふも日かくさぎねるよくにも真しなとくぶりて。汔熱川よりかの山あひそ道て

山本村といへるにてなん椿の御社なりける即式には鈴鹿郡
椿太神社とみえたり日くれぬれば御社へはえまうでず、こゝの
ミやしろのもとなる山本行道がもとを問ふ行道いとねんごろにあつ
人まつ、あるじはうきなどゐやゝかにせるも殊にいとさむくなれば
埋火のもとによりそひて古るき跡のことゞものがたりす、
物語るうちに外山の松あらしいたう嵐はげしう吹きたり、
あしひきの山松がねのかぜはらはし枕にいとゞひゞくなれね

並樹

世のなかのちりこそすれ椿にきてやどるわがその松風の音
朝日はとあてなほいづべきに雨はふりまさりければ

をやむべくもあらねばなく〱御社に詣てこそかへりなめなど
いひあへるをあるじのこたびはいそぎかへらせ給ふべき、
山のそはなるをかしかるべし、まづいやすらひて明日
なん日ごろのへせ給へなどいへぞ、さらばとてひとひ経ぬ、
ひる過ぐるほど小雨やゝをやみぬれば御社に詣づ、行道
もともなふべし、やがてかしこなるもりのうちいとかうがうしく
みえたるは幾年ふりける木立どもの枝さしかはして
しげりあひたるがさと吹来る風にさそはれて露ちりくる
まちゐつゝ袖もぬれとほりぬ、御社のまへにいたれば、かたはらに
これさまにいと清らなる椿の、花白きとあかきとが咲きて

まそらだちよりて見るに椿の木乃さし出たる葉の枝ごとに
まいでたるには、いかなる縁ぞと問へば、此社のおなするはみ
あかしる葉のまいづめたるこそむかしよりあやしきことゝいふ
なれ、またこのうしはいかなる根をつばきがふけともいひあ
べて此ほとりに椿はいとおほしとなんいふ、又この社はいなりの
神のいまされ給ふにはあらで、猿田彦の大神なりとぞ、やが
ていづきのもとをたづねのぼりて、
はふりがいふこむろのあやしき縁もつ神代よりの世し縁にも
行道がいへらく、このちかきわたりにいまし一大寺のあるじの
つとめはるが、それ詠みけるにそのもとの名などいむすし

字おほしかど今はわすれぬ、佛のみかたなどは猶のこれし
よのこれるもいざとて中のうち立たなれておしいへゆけば、
新かりぶきて柱などくちきたる庵あり、いまこそあれいとふるき
薬師のみかた一つなんおはする、かの臨のすれどかきあわて花
供ずべき皿などなし、かたはらにあやしげなるからの櫃ひとつ
あるを、あけてみれば、ひきさきて経文どもいでける、巻ごとのおくへ
しるしたるは、あるは永徳あるは康暦あるは明徳などいふ
年の名をしるして、ゆゑかきたる人と、おぼしく妙通聖周
妙香などいふ名をしるせり、また人の名も年月もしるさ
ざるあり、そこは壊れて補ひうつしたるもまたこの外すべて

大般若経になんをさまれる、おほくは巻の数五百あまりを
て、なかばのこれる巻どもは高宮の蓮華寺にをさまるとなん、古記
佛のみちにこゝろ所に猶わすれおもひいりてこそせよ
ねがはせんといへど、每郵ゆきぬれバ、えゆかず、今よひ又行在
が世に耳かて、探ぬ、二日ひるさしいでなむ〳〵風さむし
う吹て、いとさむし、椿が嶽よりすべてあるなるびる
こゝとも秋のやうに雲たちうかびあゆみ山あひ行すぎて
いづこのみいばらくらの花どもかゝぐくにさきにほひるが、
咲くる山かぜにみだれあひたり、
春のゝや椿が影のせに桜あまた咲く、いづこのはら

高宮てふ所をすぎて、原野の驛にいづ、なかばをきたへし
しる四面にひらけのわだかまるをとて、並樹
あるを田のおものが古巣を謀の男にうちかへされて、なかく雲雀
の飛くるゝちかきにほどなかへもはたおねさの白子の里より椿
の清社ちかくハ花のほどその五里にあまれるとなんいふ、

天明七年三月

香とりの日記

橘千蔭

香とりのかたより海上をわけてゆきてんとて。平安海ともも
ま出たちぬるは、う月の十日あまりやうかの日になんありける。
よし源のミつあきおもときまはばかりてせうそこさうざき
わたりより舟出して、かの君をひきまかりけりもおなじ
くれぬるほどか、いのしばしも侍るほどえ、いゝみや
びたる旅みなれ侍しども、おもひこよひばかりはべりきと。
えさらぬなからもひとかくつゞいてくるもわかしねがあきさよ。
さるは。

や瀬川のこなたしばし夏そびくうなのこなきて見いりかも
かしまつと見るかくれの志らまも光しるべく人やまほし家
なといやこ海やすみかもぬひ子のもくすりもおひはおそ。
夏そびくうなのこかくに見ゆるはわまもま藻になる海ものを
となんいひおらせまるそのはのすもこれかれわりはまども
せまもふなきがき川をこえたり。そのそはにても田ゐずまそ。苗代乃
ふなきがふとまみしこ子もやすらきん。今はひがらこおり
よ家ゐならなくて舟が有ふ川とぞかりまきる。下ばふさの
かつしかの入江にまねきてやちよといふ所をゆくに表の
はなさと遠つきやうらてなは志ろを田に墾こうらかくぞそこか

かとう 初

うしをたいまつ神のみやしろそこぞの寺大鐘のぬし
たましとはからひときけを入てこれこはさたに西岡の此
わたりをむかひしに抱よくはしまれいまつるなれ。鎌の谷のすく
ゆぞい松橋京志のかたもましまりてうはなとと流くくう
まされどもいすいすて咲き出れやちよとかすかやのわたすひまみち
まそみのへて児越といふ所へ出ず小山寺とぞいと大きなる寺
あるを入てこかしこみありくに、いまる法師にみちをと
へぞ。堂のかたそらの坂をのぼりてよとをしつるまよのぶかまめ
ずいと志つきまする山にありて。まそ海のへましも見しなかやよ
さかつかるかまつやよいこちてやどる。

十九日よりは雨も似ず空のはれわたりてかのすゞをりはくして
いと廣きあら野に出ぬ。草の中をふみわけゆくに、めづらしくおやはら
かる汁になんあるかし。こま駒どもおほくむればかりに原の
むれゆくもこえていさめつべし。千草の秋花をひやゝかて野
原なり。詠歌
まだかれぬ浦ぐさやのしげる鹿のむなさき汁いつかなるらん
千蔭
かつしかや野への道しらぬ妻恋ひて妻ごふ秋はやまも田つにせ
赤駒のまろばに田るをきふ。これは宿禰はくもおほかゆるに
その野を過て切すぎて白石といふ山路をすぐ。こは

かまはいれば岩のしるきまくて数多くいなりの日よ
とはまけし木のさ由なれどもやすわびもまされどいまは
老てかるべくもなし。そこを過て白井より木おろしの岸へ
ゆくみちのきたなりとおもふる人のまへでかめなりといふへ出
ひらうみの沼とて大きなる沼あり。瀬なうねなみともいひ
ばべし。ほそくなだか堤をゆきて木おろしの川邊よ
いる。此川ぞ刀禰の下つ瀬にて、すゞきに流るゝ
なみだそこより舟にのりて、雨も降り出ぬれば皆すくし
わきてこれぞ左の岸そ松のねびきてすくよみなしぬるか
所々よりそも太々田ちかくそばへなる枚ふるらくかど

みえわたりてをかし。こゝろほど日もやゝくれなんとするに。
雨志きりにふりて笛のしばしもあらずすゞ海
風さへいと雲海より吹く波のうへにたゞよふ刀祢の川舟

子蔭

河ぞひの笛ふる雨を月なきよなかにしるも袖ぬらしやどらでしぶ

正節

いとゞしくわびしき旅寝かな枕雨さへそゝぐ海のしばしばに
なをわびしき呂へまかく雨の音あらくくは秋舟こぐへうもな
し。神崎にまづよるべきなんど舟人いふ。神崎の東はいと
本来かうくしく海。香取郡大原といふ所の祇園が

もとへやとりもんど。雨もよほしき気色に似てかゝるべきれいやとて。
そこのいとまごひにやよ屋どる夏ともなく北の風さむし。
廿日。朝雨やゝはれば舟のと漕りそけてのる風は猶やまずや。こ
ゝろほどなく渡出すそうとれもはるゝは河ぞひのへよりあるゝる
波のちかくまでぞおなるかくらじてみくよが家のおとへ舟
よせぬ。祇園出むのへまで。雄風も出て待わびゐるとて。
郭公からのへまなきはや教川こぎゆく君が舟よするの人
となんよめりしとかいふ。ひるすぐるほどまりまして夜渡
むねその秋こくかのもとよりやどれまで。祇園旗風へしくひ
わまで家もあつらなくてもいひし旅とはこゝろそ付くれ

やまのかたへひうちしてたどりしかば秋のさ海なりけりかなて
よきこふまて。素海
もろこしも家にすれてかゝる秋は峯のまくらと何かねまらん
千蔭
此河川によするしら浪さへもとはすく河きやどりこそ
廿一日。雨なほやまず。日ひと日題を探りておもむくひなの
春海
秋のつまるせきもせて清水の寄にさへてかゝる鶏か
鶏はよやどころ。千蔭
玉河のうかひのやどは家居にほふ日並のこつきかり

かとう氏

ひとりくのたてこもりのよかいつきば夕さりほかて雨やこめ。
廿二日。朝より雨ふりおびかれ風いとさむし。けふも是をさぐ
りて哥よむ。さうび。春海
春のいたなむひやすれし夏陰にしなとする花ぞこゝろの有し
まへくおへれ。
としはたなもひやうらしんもはなはおもひこそ春をしめれ
千蔭
みしせすはわすなれなかく人いんぞゆめのこゝ路なかき
になしと。
こゝしぞまうきせの人に見えもせん咲出ねんくちなしの花

女すのもとにまちてほとくおすやう。
新なる萩なつかしくきこゆるはかなきうたに鳴て来ぬるし
きたる人このもとに来てさふやまうに詠しの歌をよみなるひし
く日をくらしつ。その秋の風なれやまだ浪の立かし。海し
くてはもやられず秋おきてこれは高き楫ともとられなど
せしも思はれなり。 廿三日。秋雨やみて風なほ吹きし。
きふかん、み国を風わかいして香取郡五峰の山といひて。
松いと老きしてずらなりける坂その川ぐらに香とり
の神社にいる。此の神さびたる家のさ海し津の宮のきし
よりあまそ常陸なる鹿島の崎へとりて海上かしこへ行ん

御船も入と風わしくてやでさんことかたしと舟人いふを聞て風
もおひてとどめて雄風酒をのませて来てそのよしの家に
いこひて別かしむ時に旋風
やよはのあしのまち浪立之人来て百とせの別をよみつる
といひ出せるきれいなしに
みなとぬとみの川あひいくそとひ切かいての界とかくしん
そこよりうちまきて津の宮丁子今市などかちよりゆきて
とね川にいたるさるの時なれ西の風ふきてたひにきれば
舟まのりてあ上の節之が家のかけくへまかでしいその
夜のさかるほどにきつ節之のもとにやどりぬ。 廿二日。

あらはれて隈もなし。蘆辺あるいして浦への道しるべして
ありんとそらちほとり。飯沼の観世音に詣づ。小松生つゞき
ある山すそ、左は崖なり。崖の下つゞきは飯ぬまに飯貝根など
いへる村ゝあり。田の面を苗代なり。その村ゝとうちこして
刀祢川の下つ瀬に出る。こなたは飯沼にはなれて和田山といへる
山なり。まは末遠く見えわたれり。かの山の尾をはなれても
なほいさごの上まで海つゞきにしたがひその尾をはなれ
てわたりに一の島二の島三の島とよびて大きなる岩は
とてまむかひ常陸の国の波崎なり。かゞやかに大海の
浪こえは波とひおそれかの波崎ようちよせある三つの岩は

あらりてかほくとけちつこえぬ。海鈴にかゝる事を。このほとりの
雨風につなぎけし大舟ともおほさはなきさてつくるさうび
出る帆影などいとおもしろくてたとへいはんかたなし。此海
海上の沖つや島はちかきにおもえて海のかなた紀ひくきやう
雲ともちかき雲ともみかけれて見せ来ていそにゆする沖つ浪
この波崎を今まで見しかとなまきとをは浪のみさきなり。
播磨国の名のほとりも浪にかゝつとよこなむれるいにしへある
べしおのねあのよく夕つゝのよみて足雄のゆきてものなど
書て日くれて節之がかやとる古雄並高あるかひ来て題
をさぐりて歌よむ。いまでおのしふ。春海

ことよいでくいひ白竜まんまのあるくバ人おもいがおもしきしめや
一歌へぞそへるふ薩
別ぬれば一よ年のわかれも昨日ゆくほどと待るひにきる
その秋そかの沖浪の音しまわずれざるくではいを探ぬますみ
も歌ばくまで。
なほそれ海上からくの彼ねまのささまのぼりてみるせば。
常陸の国と下つふさの井子流をやふ河と田ろこ
みをはやこふ里のちちゆ薩さまちなまれ来よはくに世
かしのここその極こそく一あるる大海原の瀬さるまにゆきむ
おひてあるをへば。沖浪ぞまし其の浪は寒かもあれるさ

術かもつかみてあるとえるがうちまよびいがもくる白楊の。
常九一しごとひろごりてより来るさ海は雨雲よのをもて
そくりやくは其の龍とふ神の其の海のおのその崎より
島なしてはいる岩洞よさく浪をやふてまくらげて立てよ
どび竜とみざれそのいもを拔りし波は海し流なる。詞よ
竜るといなふまさく天のおやしく其のおとのゆのかしこく
天地のそくべの波を一つさぼどくてよするこれのおき崎。

反歌

久かたのこ空よはるく波流おりよせ来る波をけふこはるも

廿五日空かれたちうきわたりの儀遺より山辺よいたりて

あるは青く見わたし、ひるすぐるころより田蔓のもとへよば
まていさりて人々、題をとりておよむ。夏日をと云落
かの名をふ照日かしこしはなれとる田ばくのこなてぬべくもすず

夏祝を　春海

なはおのさちわる宿とみゆるがいくすぢも世々に侍へて
こはその家に藥をひさげなりその枚も節々ずり屋どる。
廿六日。訪されつるがひるすくよりわたりて風たきし。惟堅
政孝忠美などともにゆふつきに節之わるしくて荒野村の
かこみなる所にはとくる。寶福寺堅賀大德を、ゑ枝子のなつそ
くなればことむつまてものはさへてまてこれのまことあまり

題とさぐりを奇よむなでしこの花咲そめたるをとむるみ
かつ〳〵も咲そめしより老の身にちなむ花を歌によみえん
釣屋に螢のとぶところにちかき
ほかどのは涼しかぜに螢とぶくれの露を袖にかけつゝ
荒野村よりいなびやはまきるは味耜高彦根の神にましまして
白幡の宮とおほしはつれて。その後社に額てふものあるをそれ
書てよとて田護のこひぬれど額なとむかしもいとわかきあ
しとてくいなみつれどゆるされおのれさきに夏みしる
わざいほことをしくすまりたる社のおまゐらするまゝに
まつる義まとくそ言はこの大神とやとてよおのれぬの

ばかりて寺よりてうちすゝれ足をとかえて笈さしあつかふのみぞ
いかでよみまんわすれつゞりのゆめことゝ人にかたらんもわたかなし
ごとまそ人わらへなれば、もらしやらむ夫のすめかゝの神の御名
をわすれさりきまをみそのにんかきてまつる神やおはすると。
人にもとひ、ことばのしもをはめしこともあるまじきかかる神
社なしをこととするの御社の御名書てまゐ人のいふもくし
きことなしわれぞ、いかで書て奉らんとおもひながら、ほあ
らひなどしてゐやすひ出て御護子あるへばさて笈の家は
わすれつまいぜんがなくてぞなんまゐてまつる。
東海のくにおかれとうたの小夫はまちいまそ白はしの宮

みむまゝをとゝめ海さなん海上のこやみのうちなるなのはなを耳
と書てみてくらし、詠みゝてまはまゐり。廿七日堅賀大徳乃
寺へまゐりて、ひたけるなほまゐりの立なみて堂のさまいとはなき
くし。御の人くとゝもにおよむ帯を海
かまそめみさまし、此田の帯もうしむすびあはぬ契りと思へ
書之子舊
信濃路やまそのかきなしあるみすはかしこのる世のことを忘るゝや
その枝かは蕣ひかりやどれも。廿八日此かまきりてのる家
ゐをうしく住なし。庭よとしまうしる松ありて。都子そひか
まつ。恵海

松の葉は根ざしつゝのうべしとぞみとせをこゝろしるまはなれ

子の巻

海上やいそ山すはの陰しめてちとせ栄えむやどゝなるらむ

香とりの伊能美之も海上へ来りてはじめて逢ひぬ。美之ハもと江戸の山川喜寛が子なるがいとわかゝりしほどに香取へ来りて人の家をはぎつぎしかる。故になかなかば江戸へ出てものとはんなどいへり。その夜も節之がやどりたりき。美之より安海のもとへもそこそこれなりとのはしき。

あるさまをたにへばおなしむさし野の草葉の露を衣とはことよ

とそおのれへもことばてせて安海がへし

ふはらてたちわかるともむさしのゝ草のゆかりをわすれまじやハ

そのちなみ喜寛を哥この事にてわかれわかかし時逢いぬせしことあれバ逢しなすれバおぼえてそのたよりにおくりてやる。

かすみのたつる秋をそぐ心は待やわびなむ此みよしのゝ里

廿九日かくあれバ節之送ふ舟出しけるまゝ江戸よりかくぞそれより安海へおもむきなんとすれバわれも安海もその舟にのりて海らんとして美之が家の前の岸よりともに舟にのる。ひとゞく儀はおぼしくておくりきす。そよ風も吹て川の西ひがしのながめ。さるの時ばかり常陸の息栖の浅社を後につ行くは今いきすといへが。あるくいつきれとしをへしとかなん。此ほどらいは川つら

いと広くぞことなり鹿島のさかひにて十あまりの島々わたりて。
ちひさき家どもところぐゝにみゆ。わくもいまし へは海まで
やおもはゝん。大海もやゝぞきれば、沖湖とはるなる島々し。
夕ばへ西の空もれやゝ入日かげやかて。平らかにひろう
なる水の面にうつひかりむかひける香とりやくゞもさかし
うちかゝるのさまも雲のうみゆるさ海とてずしてくれ色なり
鹿島の大舟はよみをばくらくなりまよりれば、みやしろまでわす
とりてんとぞ。岸なる家にやどる。おくれぞ五月のついたちら
空もれらば、とめて鹿島の神宮に詣づ。こやしのさ海。
いとかうがうしく。木立のき松杉などいくばくのとしを経よ

きんかとなりみなりてざるとすぜ枝もとれたちたてる乃
亦のこゆるいはゝしかりぎり。社殿たかえてさすりるをめぬ海
あふれあらかし海の崎のいまひ杖いとひとゝめしい神のしよかも

子落

かしまみに神さびたる杉がえの日蔭のかづらのきていくよぞ
こやるのやまとよりゑくだりてみかしまのみやらす涼き
やこなあよ清みいとおもしろますあかしかく人めぐりてやすら
大舟津よりなそ。潮来の、と川をのぼる。との川もと河の
下つ瀬のかまで。流るなるそのい川中まいくばくもなく
わし詣乃家とかゞる。家の前よ舟をつなぐすの中よそく大き

なるまでしてちひさきいをとる。いさり人こそさかえて
舟どもいそがしくて。家のしまへ子舟ばなりけり。
かくみ川やおしほの家にひとよねて涼はいさよふ月をとつべし
氷魚をあみのしとたるめれば。もち田上などのおじほは河風さむ
きにたよりたるときこそいつといふ時もなかりしとぞ。ゆふひの新
ばりはさかなをまでみやこれを若狭は田をとこそはこれとう
いひはくゆうし。堀といふところには常にしいこひ神崎
へこぎのぼる。浪白くされぬ。おなじくそこに舟よせし人こそ
香とりより江戸へのぼる人まそ。伊能泉明とてさとやくよ
里家なとをさし。はるゝ様子が艶なるさその人とも志て。

まつるが。ほくれとかくもひぬ。本おろしのたやすきのだち
また舟いとおそし。暮れもくはしのほとりはるほど。
川井まで来おきたり。舟人おりたちて綱よりのぼる。郭公
そいかなるすみか門出をしけるまきのこどもにあがりの
かたいはとやすれなりとて一声をきくに舌のどかしどころまで
はじめてさやうに鳴わたるときして。
きがれ坊とよみの川原のたやすきせにあまりとゞ添ね郭公の影
本おろしのおりしまわれて。大森白井などをへて。八幡に
いたる中ほとのぼしんい秋をこめてたよりわたりしとて。
市川をわたり関をこえて坊だらけに日くれぬるにおるゝ

さかのぼるの渡りよりわかれて舟よりのぼりて二日の秋の夜のとれ
ばかりまかへりはかりぬ。のちのたまひいでぐさまとぞなる。

寛政六年五月

県門遺稿　清水浜臣大人集

第一集　春郷家集　全一冊

第二集　小[illegible]家集　全一冊

第三集　筑波子家集　全一冊

第四集　よの子家集　涼月遺草　全一冊

第五集　日下部高豊家集　全一冊

續〳〵撰あつめてん

晩花集　下河辺長流隠士自撰家集

漫吟集　契沖阿闍梨自撰家集　合刻一冊

琴後集　平春海大人家集　初編二冊

後撰和哥集　契沖阿闍梨標注　清水浜臣大人補注　全四冊

後撰集附考　清水浜臣大人述　全二冊

古今和歌集餘材抄　契沖阿闍梨撰　荒木田大人冠注

此の書ハかの翁の續万葉論并に田氏の古注諸説を翁の冠注本まよりてよくく古学の説とものこりなく集めし

鈴屋翁像　本居大人自讃　並　稲掛大人校正　石摺

契沖阿闍梨墓碑銘摹本　祐園由豆流先生附考

冷泉先生續本末歌　鈴屋翁自筆　並　稲掛大人校正　一枚摺

類題俳諧歌集　四方歌垣大人撰

此書ハ世々の勅撰家々の集或ハものゝこりなみ廣く其ほかの歌をもよりあつめて俳諧歌の部わけせるを始とのちによむ人々の手本ともすべく古の俳諧歌あるをとりもしらずまた近世の狂歌といふものもわかちてよみかへし代々の俳諧歌のことは此書にて古の俳諧歌の心をもしらしむるは此の不りを大人自ら傳注據らるゝ

書肆

京都三條通升屋町　出雲寺文次郎

同　寺町通松原下ル　勝村治右衛門

大坂心斎橋通北久太郎町　河内屋喜兵衛

同　安堂寺町　秋田屋太右衛門

江戸日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛

同　本町通横山町壹丁目　出雲寺萬次郎

同　芝神明前　岡田屋嘉七